

いじめ加害親和性尺度の構造

The structure of bullying affinity scale

都 築 明日香*¹

Asuka TSUZUKI

巖 岩 秀 章*²

Hideaki HOROIWA

1. はじめに

近年、マスコミによっていじめ自殺事件がセンセーショナルに報道されているように、いじめ問題はますます深刻になっているのは周知の通りである。それにともない、平成25年6月に文部科学省はいじめ防止対策推進法を公布し、「いじめ防止基本方針」に基づき、いじめ防止のための処置及びいじめ問題に関する対策を規定した。そのような施策に貢献する心理学的研究を展開することが心理学界の急務であるが、いじめの根絶は不可能（作本，2008）とも考えられ、いじめをなくすためというよりも、いじめの早期発見、いじめ予防といった観点から、いじめ対策に役立つ研究が求められていると言えよう。

1980年代、いじめ自殺事件がマスコミによって取り上げられ、いじめに関する研究も数多くなされた。

1980年代以降は、いじめの実態・要因に関する研究やいじめの影響に関する研究、いじめへの対策に関する研究、いじめ観や意識に関する研究が学術誌や大学紀要等において発表されているが（戸田，2010；都築，2013）、実証的な研究は少ない（都築，2013）。また、神村・向井（1998）は、いじめの実証的研究に向けて、いじめの操作的定義づけや信頼性と妥当性の保証された測定尺度を用いることの重要をあげている。

大西・吉田（2010）は、関係性いじめと直接的いじめに該当する物語を提示し、自分がその場面の登場人物のように行動するかを質問することで「いじめ加害傾向」を調査した。いじめ行動について直接問うのではなく、物語というクッションをおいていじめへの参加の程度（加害傾向）を質問しているので、被調査者がより回答しやすかったと考えられる。

Endresen & Olweus（2001）が、いじめに対する肯定的な態度がいじめ行動に結びつくことを指摘していることと合わせて考えると、いじめの操作的定義づけを行い信頼性と妥当性の保証された測定尺度を開発していじめに関する実証的な研究を展開していくには、いじめ加害傾向の背景にあると考えられるいじめに対する肯定的な態度、つまり、いじめを理解したり受け入れるわれわれの傾向を測定することが重要な鍵となるのではないだろうか。

本研究では、このいじめに対する肯定的な態度を「いじめ加害親和性」とし、1）いじめ加害親和性の概念を構成する要素を測定するいじめ加害親和性尺度を作成すること、及び2）いじめ加害親和性といじめ加害傾向（大西・吉田，2010）との相関を検討することを目的とする。

*1 埼玉工業大学大学院人間社会研究科心理学専攻修士課程

*2 埼玉工業大学人間社会学部心理学科

2. 方法

2-1. 調査対象者

関東地方北部の大学生162名を対象に質問紙調査を実施した。有効回答者数は、158名（男子122名、女子36名、平均年齢19.99歳±4.01歳）であり、これを分析対象とした。

2-2. 手続き

調査は自由意志で参加するものあり、単位や成績とは無関係であること、調査研究の目的にのみ使用し、個人のデータが公表されないことを教示し、質問紙を実施した。

2-3. 調査内容

(1) いじめ加害親和性

いじめに参加しなくとも、いじめを心の中で肯定していることを測定するため、15項目を自作した。この15項目に対し、「以下の質問項目について、どれほど自分に当てはまると思いますか」という質問をした。評定は「とても当てはまらない」（1点）から「とても当てはまる」（4点）の4件法で求めた。

(2) いじめ加害傾向

大西・吉田（2010）が作成したいじめ加害傾向の5項目で構成した。この5項目に対し、「あなたが登場人物なら、登場人物と同じようなことをすると思いますか」という質問をした。評定は「しないと思う」（1点）から「すると思う」（4点）の4件法で求めた。

3. 結果

3-1. 因子分析

(1) いじめ加害親和性尺度の因子分析

いじめ加害親和性尺度の因子構造を検討した。まず、いじめ加害親和性尺度に含まれる15項目について、因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行った。その結果、5因子が抽出されたが、項目内容及びスクリープロットの勾配から3因子が妥当であると判断した。次に、因子数を3に設定し、2回目の因子分析（主因子法・バリマックス回転）を行った。その結果、当該因子に負荷量が絶対値.40以下の項目を削除し12項目を採用した。その後、その12項目について3回目の因子分析（主因子法・バリマックス回転）を行った。その結果は表1の通りである。

表1 いじめ加害親和性尺度の因子分析結果(主因子法・バリマックス回転後の因子付加量)

	因子			共通性
	1	2	3	
<いじめ普遍性 ($\alpha = .860$)>				
BA14_いじめたいという気持ちがあることはやむを得ないと思う。	.827	.201	.212	.769
BA13_いじめる気持ちは誰にでもある。	.765	.263	.122	.669
BA12_いじめる理由を理解できる。	.595	.393	.096	.517
BA 8_いじめたいという気持ちは万人共通だ。	.593	.480	.116	.595
<いじめの不可抗力 ($\alpha = .750$)>				
BA 6_いじめたいと思うことがある。	.181	.739	.094	.587
BA 7_いじめをしてもやむを得ないと思うことがある。	.302	.716	.120	.618
BA 5_いじめたいという気持ちがあることがわかる。	.363	.554	.075	.444
BA10_いじめられても仕方ないと思うことがある。	.204	.446	.043	.242
BA 4_周りがいじめているので、どうしてもなくいじめることがある。	.081	.442	.256	.267
<いじめの受身的肯定 ($\alpha = .750$)>				
BA11_いじめている子がいても注意しない。	.027	.199	.908	.866
BA 3_いじめられている人がいても、見て見ぬふりをすることがある。	.081	.048	.634	.411
BA15_いじめられている子がいても助けない。	.231	.103	.549	.365
因子寄与	2.339	2.306	1.707	6.35
累積寄与率	19.488	38.708	52.934	

いずれの因子も負荷量が高い項目で構成され、 α 係数も .750以上であるため、いじめ親和性尺度の構造はこの3因子から検討することとし、第一因子を「いじめ普遍性」、第二因子を「いじめの不可抗力」、第三因子を「いじめの受身的肯定」と命名した。

(2) いじめ加害傾向の因子分析

いじめ加害傾向に含まれる5項目について、因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行った。その結果、因子は1つのみ抽出された。因子のスクリープロットの勾配から一次元構造であることが仮定された。次に、一次元構造であることを確認するため、5項目について、成分数を1に設定し、主成分分析を行った。その結果は表2の通りである。「Aの遊び仲間のBはとても自分勝手なので、AはBが

表2 いじめ加害傾向の因子分析結果(主成分分析)

	成分 1
A 4_Gは気の弱いHをみているとイライラします。ある日、GはなんとなくHの持ち物を取り上げました。Hが「返して。」と言っても、Gはだれかにパスしてなかなか返しません。毎日そうやってHで遊ぶと、Gは気分がスッキリします。	.790
A 3_Eは遊び友達のFにすごく嫌なことを言われ、激しく怒っています。そこで、Eは友達に「Fがムカツクから、みんなで無視しよう」と言ってまわりました。	.777
A 2_Cは、ある友達から、「Dは気が弱くて断れないから、いつでもジュースやパンをおごってくれるよ」という情報を聞きました。そこでCはさっそくDに言って、ジュース代をもらいました。	.768
A 5_Iは、今日も英語のテストで100点を取り、授業中に先生からほめられていました。Jは、退屈だったので、「まじめ人間、ばんざい」などと言って、Iをひやかしました。ところがIは、Jを相手にしませんでした。腹をたてたJは、仲間を増やしてIをひやかすようになりました。	.747
A 1_Aの遊び仲間のBはとても自分勝手なので、AはBが大嫌いです。そこで、Aは他の友達に「Bって、自分勝手にいっしょに遊んでいても、つまらないよね。今度から、Bが遊びに来てもしいしょに遊ばないようにしよう」と言いました。	.537
累積寄与率	53.297
$\alpha = .774$	

大嫌いです。そこで、Aは他の友達に、『Bって、自分勝手にいっしょに遊んでいても、つまらないよね。今度から、Bが遊びに来てもしいしょに遊ばないようにしよう』と言いました」という項目の負荷量はやや低いものの、その他の項目において.70以上を示し、累積寄与率が53.297%となったため、一次元構造であると判断した。

3-2. 各尺度間の相関

本研究で使いたいじめ加害親和性尺度及びその下位尺度といじめ加害傾向尺度との関連を検討するためPearsonの積率相関数の算出を行った。その結果は表3の通りである。

表3 尺度間の相関係数

	1	2	3	4	5
1. いじめ普遍性	—				
2. いじめの不可抗力	.62**	—			
3. いじめの受身的肯定	.31**	.30**	—		
4. いじめ加害親和性	.87**	.87**	.58**	—	
5. いじめ加害傾向	.08	.20*	-.18*	.08	—

*.p<.05 **p<.01 ***.p<.001

表3より、いじめ普遍性及びいじめの不可抗力、いじめ普遍性及びいじめの受身的肯定、いじめ普遍性及びいじめ加害親和性、いじめ普遍性及びいじめ加害傾向、いじめの不可抗力及び いじめの受身的肯定、いじめの不可抗力及びいじめ加害親和性、いじめの受身的肯定及びいじめ加害親和性において1%水準で有意な正の相関が示された。また、いじめの不可抗力及びいじめ加害傾向において5%水準で有意な正の相関が示され、いじめの受身的肯定及びいじめ加害傾向において5%水準で有意な負の相関が示された。

4. 考察

4-1. 因子分析結果について

(1) いじめ加害親和性尺度の因子分析

いじめ加害親和性尺度については、第一因子を「いじめ普遍性」、第二因子を「いじめの不可抗力」、第三因子を「いじめの受身的肯定」と命名した。第一因子はいじめの態度全般を認め、否定せずに受け入れる姿勢を表した因子と思われる。誰にでもこのような態度や考え、気持ちがあるだろうということを表している項目群が集まっているので、普遍性とした。

このような、いじめに対する基本的な態度に対して、第二因子はいじめたい、やむを得ない、仕方ないという不可抗力を表した項目群で構成されている。これはわれわれにとって、いじめが抗いがたい側面を持つことを表しているのではないだろうか。同時に、この態度はいじめの正当化にも用いられるように思われる。

これに対して第三因子は、いじめを受身的に受け入れる態度を表した項目が集まっている。これはい

じめの普遍性や不可抗力とは異なり、いじめ場面における消極的な協力を表している。このような態度がいじめを裏面から支えてきたと言えよう。

(2) いじめ加害傾向の因子分析

いじめ加害傾向はいじめに参加する行動傾向を測るものと考えられるが、因子分析の結果からこの尺度を構成する五つの項目は、この行動傾向を適度に捉えていると考えられる。表2の五つ目の項目が他の4項目と少し傾向が違うという結果が出ているが、これはAの態度、Bの評価、あるいは仲間はずれにするという行為の性質の、いずれかによって生じたものと考えられる。それゆえこの項目をはずして、四項目で測定することも十分考えられる。

4-2. 各尺度間の相関

ここではいじめ加害親和性尺度及びその下位尺度といじめ加害傾向尺度との相関に着目する。これを見るといじめの不可抗力はいじめ加害傾向とやや高い正の相関関係にあり、いじめの受身的肯定はいじめ加害傾向とやや低い負の相関関係にある。このことは、いじめの不可抗力といじめ行動への参加は関係がある一方、いじめの受身的肯定は実際のいじめ行動への加担とは結び付かないことを示していると考えられる。

これは、1) いじめの行動を取るものはいじめは仕方ない考える傾向にある、あるいはいじめを正当化するような不可抗力の考え方がいじめ行動を促進する、2) いじめを受身的に認めるものは自らは積極的ないじめ行動を取らない傾向にあるということを表すのではないだろうか。

4-2. まとめ

(1) いじめ加害親和性尺度について

本研究では、いじめ加害親和性尺度の因子的妥当性はある程度認められたと考えられる。しかし、既存のいじめを肯定する尺度がないために自作した段階であるために、今後、ここで取り出された3因子によっていじめを肯定する態度の概念を構成できるか、更に構成概念妥当性を検討する必要がある。

(2) いじめ加害親和性といじめ加害傾向との関連について

いじめ行動をどれだけ取るか指標となるいじめ加害傾向と、いじめ加害親和性の下位尺度であるいじめの不可抗力、いじめの受身的肯定に関連が見られた。今後はこれらの関連がどのようなものか、理論的に構成して調べていくことが必要である。

引用文献

- 朝倉隆司 (2004). 中学生におけるいじめに関わる役割行動と敵意的攻撃性, 共感性との関連性 学校保健研究 46 (1) , 67-84.
- Endresen, I.M., & Olweus, D. (2001). Self-reported empathy in Norwegian adolescents: Sex differences, age trends, and relationship to bullying. In A.C. Bohart & C. Arthur, & Stipek, D.J. (Eds). (2001), Constructive and destructive behavior: Implications for family, school, and society (pp. 147-165) . Washington, D.C.: American Psychological Association. (朝倉隆司, 2004より間接引用)

-
- 神村栄一・向井隆代（1998）. 学校のいじめに関する最近の研究動向—国内の実証的研究から カウンセリング研究 31(2), 190-201.
- 大西彩子・吉田俊和（2010）. いじめの個人内生起メカニズム—集団規範の影響に着目して—実験社会心理学研究 49(2), 111-121.
- 作本真梨（2008）. 個人が感じるいじめの定義といじめの根絶視について 埼玉工業大学 人間社会学部 心理学科 卒業論文（未公刊）.
- 戸田有一（2010）. 児童・青年の発達に関する研究動向といじめ研究の展望（発達部門(児童・青年),II わが国の最近1年間における教育心理学の研究動向と展望）教育心理学年報 49, 55-66.
- 都築明日香・巖岩秀章（2013）. 学校におけるいじめに関する研究の概観 学校メンタルヘルス学会第16回大会プログラム・抄録集 61.